

新人司書教諭としての2年間
-生徒が集う空間を目指して-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学図書館情報学研究会 公開日: 2021-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳井, 孝太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21908

＜実践・事例報告＞

新人司書教諭としての2年間 —生徒が集う空間を目指して—

柳井 孝太

本稿は2019年12月14日「明治大学図書館情報学研究会シンポジウム」において、「学校図書館の1日」として行った報告をもとに再構成したものである。他の報告者から指摘や、質疑応答を踏まえて修正を加えた部分もある。同志社香里中学校・高等学校の学校図書館における業務内容や取り組み、今後の展望などについてまとめた。まだ、経験が浅く不十分な点多々あるが、学校司書や司書教諭を目指す方の参考になれば幸いである。

はじめに

私は2017年度に明治大学大学院教養デザイン研究科を修了し、2018年度から同志社香里中学校・高等学校で嘱託講師として働き始めた。2019年度からは、専任教諭として勤務を続けている。この2年間は、学校図書館という未知の職場で悪戦苦闘する日々であった。

同志社香里中学校・高等学校は、大阪府寝屋川市に位置し、生徒数は中学生758名、高校生911名（2019年5月1日現在）である。生徒の通学範囲は広く、大阪・京都・兵庫・奈良・滋賀など広範囲にわたる。過去には和歌山から通学する生徒もいたという。同志社としての歴史は1951年からであるが、それ以前の歴史も長く、1940年の大阪借行社付属中学校に遡る。その後、第二山水中学校、香里中学校・高等学校に名前を変え、1951年に学校法人同志社と合併して現在に至る。他の学校が京都にある中、唯一大阪に拠点を持つ学校である。自由主義・国際主義・キリスト教主義を掲げ、学内は自由闊達な雰囲気である。制服がなく、生徒は私服で通学している。部活動も盛んで、運動部、文化部とも多彩である。

岐阜県の公立中高で過ごした私にとって、大阪と

いう「都会」の「私立」の「キリスト教」の学校というのは、非常に新鮮なものである。現在の図書館は1985年に竣工したもので、当時からオフコンとBDS（ブックディテクションシステム）を備えた最新鋭のものであった。35年が経過した現在においても、標準以上のレベルを維持している。

同志社香里中学校・高等学校は卒業生からの寄付を元に、2020年度にメディアセンターの建設を目指している。



図1 メディアセンター 完成予想図

これは、現在の図書館と情報通信技術（ICT）を活用するスペースを一体化させた施設となる予定である。アクティブラーニングや探究学習の実施を前提とした空間づくりが進んでいる。メディアセンターは生徒が行き交う中庭に位置し、各校舎と連結さ

2020年2月6日受理

やない こうた 同志社香里中学校・高等学校

れる。生徒の動線の中心に図書館が位置することになり、まさに理想的な環境が実現しようとしている。現在の図書館で働くことができるのも、残り1年あまりとなった。その集大成としての様々な企画と、メディアセンターに向けた移行作業が始まりつつある。本稿では、司書教諭としての業務内容や、取り組んでいる企画、今後の展望などについて考察していきたい。

1. 「専任司書教諭」の仕事

1.1 学校内での立ち位置

本校では、司書や学校司書としてではなく、「専任司書教諭」として採用を行っている。授業は行わず、担任も持たない。また、部活動の指導も行わない。図書館の管理・運営を中心に行っている。時折、利用指導という形で、授業の冒頭でガイダンスを行ったり、調べ学習のサポートを行ったりする。体感としては、司書8割、教諭2割といったところだろうか。

上司の司書教諭は、当初、職員（司書）として採用された。しかし、職員では、生徒指導を行いつらいという問題があった。生徒も相手が教員ではないと、素直に指示に従わないことも多々あったという。2005年に全クラスが男女共学となったが、男子校時代には腕白な生徒も多かったようだ。また、教員の授業を支援するという観点からも、同じ教員としての立場のほうが、サポートしやすいということもあったようである。上記のような事情もあり、途中で司書教諭へと身分変更が行われたという。そうした経緯もあり、私自身は当初から、司書教諭として採用された。

授業や担任、部活動を持たないため、同じ立場であるはずの教員とはやや距離があると感じている。また、教員であることから職員とも違った立場であり、孤独なポジションである。養護教諭と非常に似た立場であるともいえる。

1.2 職場環境と業務内容

現在の職場は、専任教諭2名（50代女性1名・20代男性1名）、アルバイト職員1名の3名で構成されている。アルバイト職員は8時30分～14時までの短時間勤務である。図書館の役割は、校務分掌で「図書・情報部」として定められており、以下の通りである。

- (1) 購入図書に関すること。
- (2) 生徒図書委員の指導・助言。
- (3) 図書館利用指導。
- (4) 読書指導。
- (5) 蔵書管理に関すること。
- (6) 閲覧、貸出、複写サービス。
- (7) 調査、統計、広報活動。
- (8) 情報教室・サーバの管理・運営。
- (9) 情報機器の管理。
- (10) 学内利用者への講習会。

情報に関する仕事(8)～(10)は、情報準備室にいる業務委託のスタッフが担当しており、司書教諭が直接担当することはない。その他の校務分掌としては、総務部、教務部、生活指導部、宗教部、生徒部、入試がある。他にも図書・情報部の部員は数名おり、重要事項の決定などは図書・情報部の承認を得ることとなっているが、実務は司書教諭2名に一任されている。

通常の教員は、授業・担任・部活動・校務分掌で様々な仕事をしなければならない。その反面、司書教諭は全てが図書館関連の仕事であり、集中して業務に取り組むことができ、個人的には非常に働きやすい環境である。その反面、学校全体から孤立しやすく、情報収集が重要となる。

年間予算は、基本図書費300万円、消耗図書費160万円、PTA図書費20万円となっている。予算額は非常に充実しており、使いきれないことも多い。本の装備を全て自前で行っており、時間や人力的な制約が課題である。

1日の仕事内容は、通常の図書館と変わらない。ただし、教員として朝の時間帯に通学路で登校指導を行ったり、礼拝で奨励を行ったりする。昼休みや放課後はもちろん、授業間の10分休みも開館している。授業中も、保健室登校の生徒が来館することも多く、カウンセラーの先生も一緒に来ることもある。期せずして、図書館が「第二の保健室」としての役割を果たしている。司書がカウンセラー的な役割を果たすことを否定する学校が記事となったが¹⁾、本校では、司書教諭であることから、生徒からの相談、雑談、世間話も重要な業務の一環として扱っている。

1.3 マニュアルのない職場

図書館で働き始めて驚いたのが、マニュアルの類

がほとんど整備されていないことであった。長らく派遣職員やアルバイト職員などが短期間で入れ替わる状態が続いてきた。その結果、全ての指示を専任教員が行わなければならない、マニュアルの整備どころではなかったそうである。だが、マニュアルが整備されていないことで多くの弊害が生じていた。本の装備ひとつをとっても、人によって方法が違っていたり、綺麗に装備するテクニックや技術が共有されていないなどの問題が生じていた。

また、事務的な業務にしても口伝での伝達であったため、担当者が交代する際に一から十まで説明しなければならなかった。

そうした状態を打破するため、専任教諭2名になったことを契機にマニュアル作成を始めた。聞き取った内容を文字に起こし、作業の流れをフローチャートで整理した。時間と手間のかかる作業であったが、成果も大きかった。長年続けていた作業であっても、改めてマニュアルにしてみると短縮可能な部分が存在したり、無駄な部分が多々見つかった。マニュアルが存在することでこそ、臨機応変な対応が可能となるのである。今後、アルバイト職員を増員したときにも、有効であるだろう。

業務の属人化を防ぎ、マニュアルを整備することは、図書館にとって非常に重要であると感じる。少人数の職場であるからこそ、全員が全員の業務を担当できるようにならなければならない。ナイチンゲールは著書の中で以下のように述べている。

責任をもつ人たちは、彼らが「いなくなると皆が困る」だろうとか、彼らの配備、システム、帳簿、会計その他が自分たちをおいて他にわかる人、あるいは実施する人がいないと考えて自慢に思うらしい場合がよくある。私が思うに、備品や戸棚、帳簿、会計その他を管理するにあたって、誰もがそれを理解して継続できるような方式を進めることこそ、自慢にできる—自分が不在のときや病気のときは、あらゆることを他の人たちに引き渡して、すべてがいつものように進められ、誰かがいなくて困るということが決してないようにすることである²⁾。

1859年に出版された本ではあるが、現在でも全く同様である。まだマニュアル化できていない部分も多々あるが、今後もマニュアルの整備を続けていきたい。

2. 生徒をひきつける図書館を目指して

2.1 図書館の置かれている現状

本校では図書館の利用は非常に低調である。貸出冊数も少なく、入館者数も少ない。その要因としては、大きく2つ挙げられる。一つ目は、部活動が非常に盛んだということである。生徒の95%以上が同志社大学や同志社女子大学に推薦で進学ができる恵まれた環境で、伸び伸びと部活動が行われている。ダンス部やマンドリン部などは全国大会でも優秀な成績を収めている。各種施設も充実しており、部活動に打ち込むには最適な環境である。その反面、本は好きだが、図書館に来る余裕がないという生徒も多い。普段は全く来館しないが、長期休暇の前だけに来館する生徒がおり、話を聞いてみた。すると、「普段は部活が忙しく、中々来館する余裕もないし、借りても読めない」とのことであった。

二つ目は、図書館が授業に組み込まれていないということである。授業における図書館利用は、非常に散発的であり、体系的な指導は全く出来ていない。唯一、中学2年生が北海道への修学旅行前に行う事前学習が全員に指導できる機会である。その他は、図書館に関心のある教員が個別に活用している状態である。図書館好きの先生のクラスにならなければ、図書館利用は中2のみという生徒も多い。また、高校から入学してくる生徒に至っては、全く利用指導する機会がない。

2.2 図書館が授業で活用されるために

こうした現状を踏まえ、図書館を授業で活用してもらうために、「今年の漢字」と「英語多読」という2つの取り組みを始めた。

2.2.1 「今年の漢字」

「今年の漢字」³⁾は、日本漢字能力検定協会が毎年実施しているイベントである。図書館内に応募用紙、応募箱、ポスターを設置した。また、国語科の教員に取り組みへの協力を依頼し、授業での実施に至った。授業と図書館での応募を合わせて、388人が参加してくれた。

図書館内では、応募箱の横に漢和辞典を複数種類配置した。また、過去に選出された今年の漢字の一覧をファイリングして展示した。同じ「金」という文字でも金環日食の金、オリンピックの金、汚職事件の金、など多様な選出理由に気付き盛り上がる生

徒もいた。漢和辞典以外の本との連携ができなかったこともあり、来年度以降の課題である。

2.2.2 英語多読

近年、多くの図書館で英語多読用のリーダーを揃えるようになってきている。本図書館でも、英語科の協力を仰ぎつつ、資料の充実に努めている。多読用リーダーの蔵書数は1,000冊に届こうとしている。多読の定義は以下の通りである。

多読 (extensive reading) とは、読んで字のごとく多く読むことです。英語での多読は、辞書を使わずに比較的やさしい本を読み、細かいことは気にせずに全体の内容を把握しながら、ドンドン読み進んでいくことを言います⁴⁾。

上記のように、英語多読は非常にシンプルで効果的な反面、多様なレベルの本を数多く揃えることが求められる。これを個人で行うことは非常に難しく、図書館が活躍する場面といえるだろう。多読用のリーダーは、多くの出版社から何種類ものシリーズが出版されており、それぞれに特徴がある。それぞれのレベルや特徴を把握して、整理することが重要となる。

以前から多読用のリーダーはあったものの、体系的な整理がなされていない状態であった。そこで、生徒が分かりやすく利用できるように、本に英検のレベル、文字数を記載したシールを貼付した。出版社によっては、英検何級相当かを明記していないこともあり、英語科教員に協力してもらい、何級に相当するかを考えてもらった。“出版社は5級相当と書いているが、これは4級だろう”と変更したこともある。また、掲示物も作成して、生徒が手に取りやすいように工夫している。多種多様な多読用リーダーを把握するうえでは、丸善雄松堂株式会社のナレッジワーカーというサイトが便利である⁵⁾。

こうした取り組みもあり、英語の授業を図書館内で行い、その際に多読用リーダーを活用するケースも増加しつつある。英語科の教員から、生徒に人気のあるシリーズについて質問を受けたり、“これぐらいのレベルの本を増やしてほしい”というリクエストを頂戴することも増えた。英語科の連携は始まったばかりであり、今後更なる深化が必要である。

Young Learners Classic Readers

◆ Young Learners Classic Readersは初級学習者向けのストーリーブックです。世界中で長い間親しまれているストーリーばかりを集め、6つのレベルに分けました。レベルに合わせて簡単に楽しく読むことができ、日常生活で頻繁に使用されるボキャブラリーやイディオム、また文法を自然に習得できます。

本のカラー	レベル	総語数/冊	YL	英検	香里図書館所蔵冊数
	Level 1	約300	0.6	4級	10冊
	Level 2	約500	0.8	4級	10冊
	Level 3	約800	1.0	3級	10冊
	Level 4	約1300	1.4	3級	10冊
	Level 5	約1800	1.8-2.0	準2級	10冊
	Level 6	約2700	2.0-2.4	2級	10冊



図 2 多読用リーダーの掲示

2.3 生徒を引き付ける特集コーナー

授業での活用と同時に、生徒に対しても様々なアピールを行っている。その一つが特集コーナーの設置である。期間限定のコーナーもあれば、半ば恒久的に別置を始めたものもある。6つの実例を紹介したい。

・平成ベストセラー

トーハンのデータを参考に平成元年(1989年)から平成30年(2018年)のベストセラーを集めた⁶⁾。本を通じて、平成という時代を振り返ってもらおうというコンセプトである。総合ランキングで20位までの本で、図書館が所蔵する本を展示した。現在でも色褪せず、購入すべき価値があると判断した本も多数購入した。また、生徒が読む可能性の高い本で、汚損が激しいものは、文庫版や改訂版などを購入した。本の表紙に「平成〇年〇位」というシールを貼付することで、生徒の注目を集めた。今後は、1年ごとの展示を計画しており、間もなく初の「令和ベストセラー」も開催予定である。

・映像化コーナー

直近数か月の間に放送された映画・ドラマ・アニメ

メの原作本や、映像化作品のノベライズ本が展示されている。生徒の人気は非常に高く、貸出も多い。予約が入るのもほぼ全てこのコーナーの本である。貸し出された後でも、何の本が展示されていたかわかるように、書影と映画の告知とを並べて掲示している。



図 3 映像化コーナー 展示の様子

・ 学習マンガコーナー

従来から、漫画本が全くなかったわけではないが、一般の書架に分類されて散らばっている状態であった。まず、分散していた漫画本を一カ所に集めコーナーを設置した。生徒の反応を見ながら、新しいマンガも増やしており、『サトコとナダ』、『はじめアルゴリズム』、『健康で文化的な最低限度の生活』などが追加された。選書においては、「これも学習マンガだ！」⁷⁾を参考にしている。

私自身は、学習マンガは生徒にとって非常に有益であると考えている。題材、内容とも非常にレベルの高い作品も数多く出版されている。本への橋渡しとしての役割はもちろん、マンガだけでも是非、生徒に手に取ってもらいたいと考えている。しかしながら、全ての教員がマンガの購入に賛成しているわけではない。また、明確な選書基準の策定も済んでおらず、今後、慎重に検討が必要である。

・ 科学道 100 冊

科学道 100 冊は、理化学研究所と編集工学研究所が実施する本を通じて科学のおもしろさ素晴らしさを伝える試みである。

本校の司書教諭は 2 名とも、社会科と地歴公民の免許である。TRC が刊行する『週刊新刊全点案内』

を中心に、偏りのない選書を心掛けてはいるが、理数系の分野がどうしても手薄になる現状があった。こうしたコーナーの設置は、蔵書のバランスを取るうえでも重要な試みである。

人気があるわけではないが、普段図書館に来ない生徒が興味を示すことが多く、普段の利用者層とは異なる生徒に届いているようである。



図 4 「科学道 100 冊」展示の様子

・ 明治維新 150 周年記念コーナー

2018 年が明治維新から 150 年であることを記念したコーナーである。工夫した点としては、本を単に分類順に並べるだけでなく、「幕府側」と「新政府側」とに分けて展示した。立場によって一つの出来事でも、多様な解釈があることをアピールした。

・ 文庫(ノンフィクション)コーナー

文庫本は、生徒にとって非常に人気のある存在である。1 日カウンターで貸出返却を行っていて、文庫本以外の本に出会うことの方が珍しいという印象である。その要因は様々に考えられるが、通学中の電車の中で読むのに適しているということである。生徒からも通学中に読んでいるとの声をよく聞く。広範囲から長時間かけて通学する生徒も多いことから、通学時間が貴重な読書タイムとなっているようである。

913.6 に分類される文庫本は、当初から別置されてきた。一方で全く注目されていない文庫本があった。それがノンフィクションの文庫本である。こうした文庫本は分類されて一般の書架に排架されてきた。しかし、大きな本の間に挟まれて目立たず、紛れて行方不明になることも多かった。そこで、ノンフィクションの文庫本の一カ所に集めたのが、文庫(ノンフィクション)コーナーである。まだ、生徒

の反応は少ないが、以前よりも貸出が増えつつある。手軽に読める文庫本の人気にあやかり、小説以外の本にも読書の幅を広げる効果を狙っている。

2.4 新聞記事を活用した取り組み

最後に取り上げるのが、新聞記事を活用した図書館活性化である。図書館では、朝日・読売・毎日・日経・産経の5紙を購読している。また、朝日けんさくくん・聞蔵Ⅱビジュアル(朝日)、毎索ジュニア(毎日)、ヨミダス for スクール(読売)のデータベースも契約している。同時アクセス数も50あり、大学と比較しても遜色のない環境にある。しかしながら、紙媒体の新聞を見る生徒はほとんどおらず、データベースについても時折授業で活用される程度で低調である。

そこで、少しでも新聞に関心を持ってもらうために館内の掲示板に「同志社香里新聞記事コーナー」を設置した。1日に一度、新聞記事データベースを検索し、学校関連の記事(部活動での活躍、OB・OG・教職員の活躍など)があれば、印刷してジャンルごとに掲示している。原紙はスクラップして保存する。同時に、エクセルでデータベースを作成しており、記事の日時、タイトル、掲載紙などをリストアップしている。日経と産経に関しては、データベースの契約がないため、研修等で大阪府立図書館に出向いた際にデータベースで検索して、学校に帰ってから反映させるようにしている。

生徒の反応は中々よく、掲示板の前で自分や先輩後輩の記事をグループで眺めている光景を目にすることも多い。こうした記事を目当てに、新聞に興味を持ち、図書館に足を運ぶ生徒が増えることを願っている。

3. メディアセンターへの移行へ向けて

メディアセンターへの移行を来春に控えて、1月から蔵書の整理が始まった。また、メディアセンターを教員に活用してもらうにはどうすればよいのか、検討も始まりつつある。ここでは、蔵書管理と授業における図書館活用について考察したい。

3.1 蔵書の管理徹底と排架方法の見直し

現在の蔵書数は87,453冊(2018年度末)ということになっている。だが、実際に活用できる本の数は遥かに少ないというのが実情である。移転に向け

て書庫の整理を始めたばかりだが、予想以上に古く、状態も悪い本が多い。これらの本を除籍したとき、果たして何冊の本が残るのか心もとない。大阪借行社時代の貴重な蔵書も混在しており、慎重な選別が必要である。今までは、日常業務に追われて除籍作業が停滞していた。除籍作業は新規購入と同様に重要な業務であり、円滑に進めて蔵書の若返りを進めたい。

開架の排架方法についても検討の余地がある。現在は、黒の三段ラベルを使用しており、一段目に分類記号、二段目に著者の姓をアルファベットで1文字、三段目に巻数や年次をとっている。

返本台を設置していないため、生徒は自力で本を書架に戻す必要がある。これが、本が行方不明になる原因となっている。また、アルファベットで1字しかとっていないため、同じ著者の本であっても、離れた場所に置かれてしまうことになる。

対策としては、ラベルの色を変えることが有効だと考えられる。1類は黒、2類は赤、3類は緑などにすれば、本を書架に戻すハードルが下がると思われる。また、アルファベット1字ではなく2字を取るようにすれば、同一著者の本を固めることもできるだろう。

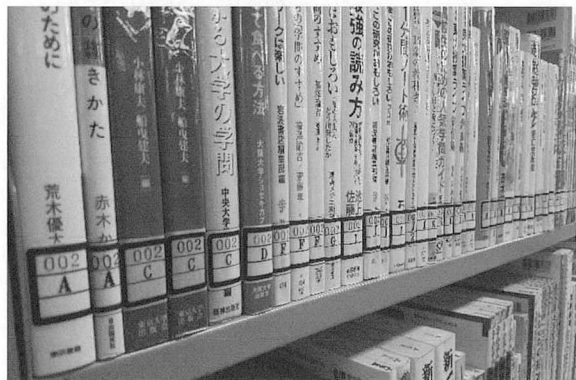


図5 書架に並ぶ本とラベル

3.2 授業における図書館活用

2章でも触れたように、授業における図書館利用はあまり活発ではない。その根源には、教員の学校図書館や司書教諭に対する誤解があると感じている。職員(司書)としての時期が長かったこともあり、授業支援を頼むという発想がそもそもない教員が多いのである。

以前、修学旅行前の調べ学習を支援した時のことである。生徒は本から得た情報をプリントにまとめていく。その際に、出典を正確に書けない生徒が多

くいた。そこで、初めての試みとして、司書教諭がプリントの添削を行った。版と刷の理解が足りず、出版年を間違える生徒、著者と発行者を混同する生徒が多かった。添削で多く見つかった誤りをプリントにまとめ、次の授業の冒頭で、15分ほど説明をする時間を頂いた。授業終了後に、担当教員から“プリントの添削、助かりました。こんなことまで願ってすいません”という発言があった。司書教諭として、まさにこうした添削や講評こそが主たる業務である。ところが、担当教員は、「図書館の管理運営が仕事の人に、授業の手伝いまでしてもらった。」という認識を持っていたのである。

こうした認識を変えていくためには、地道なPRが欠かせない。教員に対して、学校図書館の本来の役割を知ってもらい、図書館のファンになってもらわなければならない。そうしなければ、図書館はいつまでも、教育現場の「オマケ」のような存在のままであるだろう。あれば嬉しいが、なくてもさほど困らないといった具合である。学校司書の配置増を求める国会決議案に日本維新の会が反対したことが話題となった⁶⁾。司書の仕事は人工知能(AI)で代替可能になるとの判断であるらしい。確かに単に本の貸し借りであれば、既に自動貸し出し機で代替可能である。学校図書館は授業に欠かせない存在であり、司書教諭は授業の支援が主たる業務であるという認識を浸透させていかなければ、こうした現状は変わらないだろう。

私学は、公立と異なり教職員の転勤がない。その為、一度教員の認識を変えることができれば、その効果は安定的に持続する。メディアセンターでは、授業に活用できるスペースが多く確保される予定である。これ機会に、学校図書館、司書教諭のイメージを一変させるべく、積極的にアピールをしていきたいと考えている。

おわりに

初めて学校図書館という現場に飛び込んでから、2

年が経過しようとしている。よく地方創生には「よそ者、若者、ばか者」が必要だと言われることがある。岐阜で生まれ、明治大学を卒業したばかりの私は、まさに「若者」「よそ者」であった。図書館で勤務した経験がなく、実務経験もない「ばか者」でもあった。2年近くが経過する中で、少しずつ慣れていく自分がいる。常に初めて学校図書館に足を踏み入れた新鮮な気持ちを忘れず、常に「よそ者」「ばか者」であり続けたい。

今回、シンポジウムで発表の機会を頂き、実践・事例報告を書く機会も頂戴したことは、改めて自らを振り返る良い機会となった。司書課程の先生方、図書館情報学研究会の皆様改めて感謝申し上げます。

注・引用文献

- 1) 「学校司書を考える 図書館の「心の支え」なぜ消えた」『西日本新聞』 <https://www.nishinippon.co.jp/item/n/576852/> (参照 2020-02-02)
- 2) フロレンス・ナイティンゲール著 小玉香津子・尾田葉子訳『看護覚え書き：本当の看護とそうでない看護』日本看護協会出版会、2004、45p
- 3) 日本漢字能力検定協会 今年の漢字 <https://www.kanken.or.jp/kotoshinokanji/> (参照 2020-02-02)
- 4) 高瀬敦子『英語多読・多聴指導マニュアル』大修館書店、2010、p3
- 5) 丸善雄松堂株式会社 ナレッジワーカー 【洋書に触れる2019-2020】 <http://kw.maruzen.co.jp/nfc/featurePage.html?requestUrl=touch2019-2020/> (参照 2020-02-02)
- 6) 株式会社 トーハン 年間ベストセラーアーカイブ <https://www.tohan.jp/bestsellers/past.html> (参照 2020-02-02)
- 7) これも学習マンガだ！ <http://gakushumanga.jp/> (参照 2020-02-02)
- 8) 「維新「司書はAIで代替可能」」『西日本新聞』 <https://www.nishinippon.co.jp/item/o/569589/> (参照 2020-02-02)